

氏 名	わ だ とし ひろ 和 田 利 博
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 346 号
学位授与の日付	平 成 18 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 思 想 文 化 学 専 攻
学位論文題目	エピクロスの倫理学

論文調査委員	(主 査) 助教授 中 畑 正 志	教 授 川 添 信 介	教 授 小 林 道 夫
--------	----------------------	-------------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、エピクロスの倫理学について、生の目的とされる「快樂」概念の内実の確定を出発点として、死と生、友情、そして行為の自由という、いずれもその思想の根幹となっている局面を、与えられている資料にできうるかぎり即して解明することを目指したものである。

序章「研究の背景」では、まず、次章以降の本論に対する導入部として、エピクロスを研究するに際し基本となる資料の種類とそれらの性格、解釈に利用する上での諸問題、ならびにこれまでの研究状況などが概観される。

そうした背景を踏まえた上で、第1章「快樂論」では、本稿全体の通奏低音とでも言うべき「快樂」の概念の究明が試みられる。エピクロスは、快樂のうちに、苦痛のない状態を意味する「静的快樂」と通常の快の感覚を意味する「動的快樂」という二つの種類を認めている。しかしこの快樂について、一方では「静的快樂」のみを「生の目的」として位置づける見方を提示しながら、他方では「動的快樂」に対しても「それを遠ざけるならば、何を善と考えてよいか、わたしにはわからない」というように高い評価を与えているように見える。一見不調和に見えるこの快樂の理解について、論者は、残された断片と後代の証言を仔細に検討し、その結果通常理解に反して、静的快樂のみが自体的価値をもつ目的であり、すべての動的快樂はこの静的快樂の先在を前提とし、もっぱらそれを「多様化する」あるいは「多彩な姿に潤色する」ものである、という結論を導いている。さらに静的快樂は、われわれが実際に感じている心理的な状態ではなく、そこに「快」や「悦び」を感じる現実的あるいは可能的な「対象」とであると特定し、そのような対象である静的快樂はただ反省的にのみ「善」として認識されると主張する。これに対して動的快樂は、快の現実的感覚をもたすがゆえに、善の獲得にある種の保証を与えうる。しかし論者によれば、動的快樂は、あくまでそのような静的快樂に付帯して生起する場合のみ望ましいという、依存的価値しかもちえないのである。

第2章「死への恐れの問題」と第3章「不死への憧れの問題」では、以上の快樂の分析を踏まえて、エピクロスの「死」と「生」についての理解がそれぞれ解明されている。まず、論者は「死はわれわれにとって何ものでもない」というきわめて反常識的なエピクロスの主張の意味を明らかにするとともに、それをさまざまな批判から擁護している。エピクロスの主張は、死とは感覚の剝奪であるが、それは死者のみならず生者にとっても悪しきものでなく、また「悪ではないもの」を恐れることに正当な理由は存在しない以上、「われわれが現在、死を恐れるのは合理的でない」という推論から導かれている。「死への恐怖」の不合理性というこの主張を支えるのは、自己の出生前の状態と死後の状態とが主体の非存在という点では同等であり、生を挟んで対称的で関係にあることに基づく論証 (symmetry argument) である。エピクロスは、この対称的な二つの状態に対して、出生以前の非存在に対してわれわれは無関心でありながら死後の非存在に対してのみ恐怖心を抱くという非対称的な態度を採ることの不合理性を指摘した。この論証は、死の意味をめぐる理論的考察のための優れた手引きとして、現代の哲学的分析においてもしばしば参照されるが、同時に数多くの批判の対象でもある。そうした批判は、(1) 両時期の間の対称性は認めながらも、われわれが有する未来へのバイアスに訴えて、そうした両時期に対し非対称的な態度

をとることの合理性を認める、(2)両時期の間の対称性それ自体を否定した上で、死は生における善きものを奪うがゆえに悪しきものである、という二つのタイプに大別できる。論者は、いずれの批判に対しても多くの点からねばり強い再反論を展開しているが、基本的には、(1)に対しては、対称的な事態であるにもかかわらず未来に対してのみわれわれがバイアスをもつことが合理的なのは、その未来の出来事がわれわれによって経験されうる事態であるという場合だけであり、経験主体そのものの非存在を含意する死に対しては妥当しないという理由によって却下する。また、(2)に対しては、出生前と死後とを非対称であるとする論拠は不十分であること、またかりに非対称であっても死とは「生の主体から善きものを剝奪する」というよりも、「その剝奪から当の主体を除去する」ことであるという理由でこの批判を斥けている。論者によれば、われわれの直観的な反発にもかかわらず、エピクロスの主張はいまだ有効であり続けているのである。

続く第3章では、前章と同様の主題に対し、「生」の側からの接近が試みられている。「無限の時間と有限の時間は、快樂を等しいだけ有している」というエピクロスの言葉は、生の時間的な長さは重要でないことを意味する。これに対しては、苦痛には持続による増大を認めておきながら快樂については時間的な増大を否定しているという点でエピクロスの矛盾が指摘されてきた。しかし論者は、エピクロスがそこで問題にしている快樂とは、あくまでも静的快樂のことであり、動的快樂の持続による増大までもが否定されているわけではないこと、そしてこのような反直観的な主張の背後には、人が静的快樂に到達しうる最短限の時間を生き、いったん現実にもそれへ到達するなら、すでに「完全な生」を得ているというエピクロス独自の生の理解があることを明らかにしている。また、エピクロスが解消に取り組んでいるのは「可死性」への恐れにすぎないが真に重要なのは十分に成熟する以前に死を迎えるという「夭逝」への恐れであり、あまりに短い生は完全なものたりえないのではないか、という批判も存在するが、論者はその「夭逝」という概念の曖昧さを指摘してこの批判に対抗している。さらに、以上のエピクロスの立場からは、耐えがたい苦痛が長期にわたるためもはや善き生を維持することが不可能だろうという予測に疑いの余地がない場合にかぎり、自殺も確かに合理的な選択肢であった、というのが論者の主張である。

第4章「アトムの逸れと行為の自発性」では、論者はエピクロスの倫理学と自然哲学との関係に目を向け、原子論におけるアトムの「逸れ」という彼独自の説とわれわれに道德的責任が帰されるための条件である行為の自由・自発性との関係を考察している。エピクロスは、アトムに本性的な運動として、アトム自身のもつ重さによる垂直落下を導入した。論者によればアトムの逸れは、(i)宇宙論においては、この垂直運動に逸脱をつくりアトム同士の衝突の始まりをつくり出すことと、(ii)行為論においては、そのアトム同士の衝突の連鎖を絶つ、という二つの役割を担っている。論者は、アトムが演じる役割を、アトムによる垂直落下運動という「必然」から解放するものであるとする従来の有力な解釈を斥け、むしろアトムが逸れ自身がつくりだしたアトム同士の衝突の連鎖という「必然」を絶つという点に求める。さらにエピクロスにとって、必然からの回避は、「偶然」か「われわれの力の範囲内にあるもの」かのいずれかを意味するが、それらは二者択一でなく場合によってそのいずれでもありうると推測する。すなわち、エピクロスが一般的な意味で「偶然」と呼んだのは、魂の外部でも生じうるアトムによる逸れのことである。そして「われわれの力の範囲内にあるもの」とは、魂の内部で生じるアトムによる逸れを運動の始まりに持つ行為のことなのである。テキストに基づいて確認できるエピクロスの真意は、魂の内部でアトムによる逸れが生じる場合にはじめて行為の自発性と責任帰属のための必要条件が用意されるということである。

最後に、第5章「友情論」では、エピクロスとその学派内部での、友情に関する整合的な見解の有無が検討されている。エピクロスにとって友情とは自己が幸福へ至るための手段であるが、他方でエピクロスは友情をきわめて重要視しており、さらに友情に自体的な価値を認めるかのような発言も残している。論者はキケロ『善悪の究極について』の一節についての緻密な検討に基づいて、エピクロス自身の見解はあくまで利己主義的なものであり、「賢者は友人に対しても、自分自身に対するのと同様に性向づけられる」という見解もその利己主義的な立場から説明することが可能であること、またこれに反するように見える一部の資料は、エピクロス本人でなく後代の利他主義的なエピクロス派へと帰されるに足る十分な理由が存在していることを文献学的に示している。

最後に論者は、以上の諸論点のいっそう有機的な関係づけと、自然学を含めたエピクロスの思想全体のなかでの倫理学の位置づけの提示という残された課題を確認している。

論文審査の結果の要旨

「エピキュリアン」が「快樂主義者」の同義語であるように、一般的にはエピクロスは快樂に至上の価値を与えた哲学者として理解されている。しかし実際には、その著作は膨大であったという伝承にもかかわらず、現存するものはきわめて少なく、その思想の探索には間接的な資料に多く頼らざるをえない。またそのような資料によると、「苦痛のない状態こそが目指されるべき快樂である」とか「死を恐れることは不合理だ」というような、快樂主義の枠には収まらないばかりか日常的直観にも反するような見解がその思想の根幹部を構成している。その結果、エピクロスの倫理思想の解釈は多種多様であり、その逆説的主張の妥当性も、現代の哲学者たちをも巻きこんで論争的となっている。

こうした状況のなかで、論者はエピクロスの倫理学を支える主要な教説を取りあげ、情報源のそれぞれの性格や傾向に注意しつつ、残存する資料に可能なかぎり即したかたちで独自の解釈を提出している。もちろん多くの二次文献も抜かりなく参照しているが、話題の興味深さのために思弁的分析に陥りがちな最近の研究動向のなかで、論者の考察の手続きは古典哲学研究として正当なものであると評価できる。

論者はまず第1章において、本稿全体の基本概念となる「快樂」の意味を究明する。エピクロスは、苦痛のない状態を意味する「静的快樂」と通常の快の感覚を意味する「動的快樂」という二つの種類を認めながら、この二つの快樂についてそれぞれを最重要視するような一見矛盾するような評価を与えているため、解釈者を困惑させてきた。論者は、二種類の快樂の関係について、静的快樂こそ生の目的であり、動的快樂は静的快樂の先在を前提としつつ、快の実際の感覚を与えることを通じて善の獲得にある種の保証を与えうるかぎりで価値を有する、という解釈を導いている。以上のすべてが独自の新解釈というわけではないが、論者は、従来の解釈の種々の不備を的確に指摘するとともに、一つの説得的な解釈の方向性を示すのに成功していると言ってよい。

第2章と第3章では、以上の快樂の分析を踏まえて、「死」と「生」についてのエピクロスの理解がそれぞれ解明されている。エピクロスによれば死を恐れることは不合理である。この主張を支えるのは、出生前の状態と死後の状態とが生を挟んで対称的關係にあることに基づく論証 (symmetry argument)、すなわちこの対称的な二つの状態に対して、出生以前の自己の非存在に対しては無関心でありながら死後の自己の非存在に対してのみ恐怖心を抱くという非対称的な態度を採ることは不合理性であるという論証である。これに対しては多くの批判が寄せられてきたが、論者はエピクロスを擁護するためにねばり強い議論を展開している。まず、出生前と死後の対称性自体を否定する議論に対してさまざまな角度から有効な反論をおこない、さらに、両時期の間の対称性は認めながらもわれわれのもつ未来に対する関心やバイアスに訴えて対称的な両時期に対して非対称的な態度をとるのは合理的だとする批判に対しても、対称的な事態であるにもかかわらず未来に対してのみわれわれがバイアスをもつことが合理的なのは、未来の出来事がわれわれによって経験されうるとする場合だけであり、経験主体が消滅しその出来事が経験不可能であることを含意する死に対しては、その合理性は認められないことを指摘する。死の恐怖をめぐる論者の詳細な議論は、エピクロス解釈としても優れたものであるばかりでなく、この論題にかかわる D. Parfit や T. Nagel をはじめとした現代の分析的議論をも射程に収めたきわめて興味深いものであり、本論文のなかでも出色の部分と言えよう。続く第3章では、前章と同様の主題に対し、「生」の側からの接近が試みられる。エピクロスに対して、従来、苦痛には持続による増大を認めながら快樂については時間的持続による増大を否定しているという矛盾が指摘されてきた。しかし論者は、エピクロスの主張の背後には、人が静的快樂に到達しうる最短限の時間を生きてそれへ到達したなら、すでに「完全な生」にあるというエピクロス独特の生の理解があることを明らかにしている。

第4章では、エピクロスの原子論におけるアトム「逸れ」(clinamen) という独自の構想とわれわれの行為の自発性・自由との関係を考察し、アトムの逸れが断ち切るべき決定論的必然性が、アトム自身の垂直落下運動であるという有力な解釈を斥け、アトムの逸れ自身が引き起こしたアトム同士の衝突の連鎖であると解釈し、逸れがわれわれの魂の内部で生ずることが行為の自発性の必要条件となるという点にエピクロスの真意を見出す。また最終章では、エピクロスが友情をきわめて重要と考えつつも、それが自己の幸福実現のための手段であるという利己主義的な立場をとっていることを確認し、このような利己主義からエピクロスを救おうとする近年の解釈の傾向を文献的な論拠から批判するとともに、利他主義的見解は利己主義的立場から説明可能であることを示している。いずれも残された資料に即して一つの整合的な見方を打ち出してい

ると評価できる。

このように本論文は、それぞれの論点については意義ある知見を提示しているが、しかし改善の余地や残された課題も少なくない。論者自身の解釈に対して予想される批判がときとして十分には検討されていないこと、またエピクロスの倫理学がその独特の快樂理解を核とすることは読み取れるが各論点相互の有機的關係の提示には至っていないことなどがそうである。また自然学を含めたエピクロス哲学全体のなかでの倫理学の位置づけを考察することも今後の研究に待たねばならない。とはいえ、これらの点は論者自身がよく自覚していることでもあり、本論文はそのための重要な出発点としてすぐれた成果と評価するにやぶさかではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2006年1月30日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。